

べての人を一つにしてください。」ヨハネによる福音書 17 章 20、21 節 a

イエスは十字架にかかる前夜、父なる神にこのように祈られた。「彼らの言葉によってわたしを信じる人々」とは、21 世紀の今を生きるわれわれのことではないか。人の間を引き裂こうとするあらゆる妨げを乗り越えて、私たちが一つになるようにととりなしの祈りをされたイエス・キリストは今も生きておられる。この方から目を離さないで共に前進したいのである。

## 註

- (1) 佐々木公明『遠野での「物語」－プゼル先生最終章』2019 年、p.6
- (2) 尚綱女学院 100 年史編纂委員会『尚綱女学院 100 年史』尚綱女学院、2002 年、p.157
- (3) 聖書の創世記 26 章 12 節から 25 節
- (4) ロバート L. スティブンス『根付いた花－メリー・D・ジェッシーと尚綱女学院』キリスト新聞社、2003 年、p.149
- (5) 出エジプト記 20 章 3－5 節
- (6) 前掲書 (2)、p.255

## 尚綱に咲いた花

准教授 土 田 定 克

尚綱に勤めて十三年、この学び舎に初めて花が咲いた。味気ない白い廊下に、新緑萌え出ずる多目的広場に、赤や黄や桃色の花が咲いた。春の日を浴びて輝く姿は眩しくて、とても正視できたものではない。

それは 2020 年 3 月 18 日、コロナを避けて急遽学内で短く挙げた卒業式の後。きれいに着飾って晴れの日を迎えた教え子たちは口を揃えて言う。「最後の日を、通い慣れた場所で過ごせてよかったよね」と。そんな健気な花姫たちが教えてくれたこと――。

種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい (マタイ 13: 3～9)。

まず「種」とはそもそも福音書の言葉を指し、種が落ちる所は人の「心の状態」を示す点を断っておかなければならない (マタイ 13: 18～23 参照)。つまりここで言うところの「良い土地」とは、素直に聞く心や感謝して受け入れる心、つまり「謙虚な心」を指す。

そのような心のありかを、教え子たちは旅立つ日に見せてくれた。彼女たちは尚綱という母校と友を大事に思っていた。そして今ここに共にいられることに喜びを見出していた。思えば

彼らこそ、台風で尚志祭が流れたとき「無観客でも構わないから恒例の学内コンサートをやり遂げよう」と言い出した学年だった。その思い、その意欲……、伊達に尚綱で育った学生ではない。

なにせ尚綱という校名自体が、心の状態を表す雅称である。衣錦尚綱とは「心の謙虚さ」を指すからだ。

そんな尚綱であればこそ、こんな解釈も許されよう。聖句の「種」とは、別の見方をすれば尚綱という畑に入ってくる園児・生徒・学生だと言えないだろうか。この畑にはいろんな種が入ってくる。同じ種はない。彼らがどんな風に成長するかは当人の実力もさることながら、受け入れる畑の状態にも掛かっている。とするならば、問われているのは私たちの心のありかとなるだろう。

尚綱といえば、何はともあれブゼル先生。そのブゼル先生がよく放った言葉が「Do your best, your very best!」である（栗原基『ブゼル先生傳』ブゼル先生記念事業期成會、1940年、849頁）。さすが一粒の種から百倍以上の実をもたらしたお方は言うことが違う。あえて訳せば「ベストを尽くせ、めいっぱい最善を尽くせ」となるだろうか。ここには人の可能性をとことん開花させるキリスト教の特長がある。

キリスト教は、太陽のような教えである。その光と温もりは「種」の発芽を促し、成長を支えて開花へと導く。悔い改めよ、と身を引き締める一方で、陽だまりのような心地よさで包み込む。救い主を信じればこそ、自分自身の殻を破って成長できるという。その歩みは尚綱学院歌が歌い上げる「信、望、愛」の道（コリント13:13）。人の向上心を奮い立たせるこの道は、どこまで行っても限界がない。

尚綱学院歌といえば、ブゼル先生が重んじていた音楽だ。音楽こそ、当時から今まで変わることなく守られてきた尚綱の特長である。音楽には信じる気持ち、天を仰ぐ気持ち、心をゆり動かす全てのものへの思いを解き放つ力がある。それは静かに聴く耳を養い、自省する目を啓き、情操という内面の営みを育む。そこで見たものを人は信じるがゆえに語り、望むがゆえに説き、愛するがゆえに告げる。その思いが言葉に収まりきらなくなったとき思いがけず歌い出す。この魂を突き上げる衝動なくして音楽はない。この魂を揺さぶる歌なくして人生に花はない。「生きている」、この震える喜びを永遠に向かってめいっぱい叫ぼうとするから、熱い思いが歌の流れとなってほとばしるのだ。やがて歌声は仲間を巻き込んで、斉唱や合唱となって一つに溶け合ってゆく。命ある魂の叫びが織りなすこの一体感。こうして礼拝堂に響き渡る賛美歌は、今日も自己を深め、他者と共に生きる愛へと私たちに誘っている。そして、熱い心を、響かせている。

そういう温かいキリスト教の精神が、この尚綱の根底にどっしりと根付いているのだ。必ずしもいつも表立って見えてはいなくても、じわじわと、ゆっくりと、幼稚園から大学まで学院全体を包んでいるのだ。尚綱——それは愛を育む畑。ブゼル先生が命を懸けて耕した畑は、キリストの光と愛を浴びて柔らかく種を育み続けている。

窓の外を見れば、ゆりが丘も桜の蕾がほころび始めた。息をしているこの一瞬一瞬が、この花びらのように切ないほどありがたい。今年もまた、もうすぐ新入生が入ってくる。この一年、

わたしたちはどれだけ豊かな畑であるだろうか。萌え出ずる種が途中で枯れてしまわないように、何十倍もの実がなるように、祈りを込めて教育できるだろうか。

建物は朽ちる、人は入れ替わる、でもブゼル先生が掲げた理念は変わることがない。衣錦尚絅——この聖なる四文字は究極的に、神の身分でありながら遜って人体をまとわれた主イエス・キリストご自身の生き方を表している。

たとえ在学中に尚絅の深みが理解できなくてもいい。いつの日か母校を懐かしく思い出したとき、この校名の深みがぐっと胸に迫って響くこともあるかもしれない。だってこの子たちは台風で尚志祭が流れても、コロナで卒業式が端折られても、その中に生きる喜びをきちんと見出すことができたではないか。

巣立ちゆく教え子の後ろ姿を眺めていたら、人知れずそんな確信が湧いたのであった。ブゼル先生の畑で育った「梅の花」は、きっと今ごろ新しい土地で気高く香っているに違いない。

## 神に仕える尚絅

教授 上 村 静

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富（マモン）とに仕えることはできない。」  
(マタイ 6:24 [新共同訳])

### 1. 「政教分離」という欺瞞

西洋近代は宗教改革によって幕を開けた。それは宗教戦争の時代をもたらし、やがて教会による支配から国家による統治へと進展し、国民国家という新しい統治形態を生み出した。近代西洋国民国家は「政教分離」を掲げる。しかし、国家と宗教の間には緊張関係がある。「政教分離」は、宗教を「私的な領域」、心の問題に限定することを要求する。今日「宗教」と呼ばれている事柄は、近代以前においては概念化されていなかった。「宗教的なもの」は政治・経済はもとより、人々の日常生活のあらゆる側面を規定する世界観・価値観であり、それを「宗教」(religion)という言葉で対象化することはなかった。近代国民国家の成立過程において、「公的な領域」から教会が締め出されていったとき、「私的な領域」としての信教の自由が考案されるにいたった。国民国家の典型とされるフランスにおいて政教分離は「ライシテ」と呼ばれるが、今日においてなお「宗教」を「公的な領域」に持ち込むことは禁じられている（ムスリムの女子学生がスカーフを巻いて登校することなどが禁じられている）。

国民国家が宗教を公的領域から排除するのは、神信仰が国家への忠誠を揺るがすからである。資本主義と手を組んだ国民国家（マモン）は、神が自らを規制することを毛嫌いするのである。そこで神を「私的な領域」、心の問題へと閉じ込めるために「宗教」という概念を創り出し、「公的な領域」から排除した。ここに「政教分離」なる擬制が誕生した。

国民国家は国民に自らに対する忠誠を要求するのだが、ここにはプロテスタントの人間理解